

新刊紹介

齋藤正二著

『齋藤正二著作選集7 教育思想・教育史の研究』

伊藤 貴雄

1. 『若き牧口常三郎』の《続編》を収録

あえて著者紹介をするまでもあるまいが、齋藤正二（1925年ー）は、戦後半世紀にわたり、日本思想史研究の領野で新生面を切り開いてきた泰斗である。伝統的イデオロギーの形成過程を《語用論》的に解析した『「やまとだまし」の文化史』（1972年）や、日本の自然観の中国起源およびその展開を《百科全書》的に描出した『日本の自然観の研究』（2冊、1975年）、そして、国粹主義的サクラ観の解体と社会科学的サクラ観の樹立とを提唱し、著者に「サクラ博士」⁽¹⁾ という呼称を与える機縁となった『日本人とサクラ』（1980年）など、その主な業績を収録した《著作選集》全7巻の刊行は、たんに学術にたずさわる者のみならず、思想史・文化史に関心をもつすべての人にとって欣快とすべき朗報であろう。

さて、第6回配本の本巻（第7巻）は、「教育思想・教育史の研究」との副題をもつ。もとより齋藤の学的営為の守備範囲は、日本思想史のみに限られない。21歳で『アララギ』同人欄作家に推挙され、その後も『日本短歌』（日本短歌社）、『短歌』（角川書店）等の雑誌や『現代日本詩人全集』（東京創元社）の編集長として文芸批評の方面に健筆をふるい、他方、アラン、ランボー、カンディンスキー、エリアーデ、スウィフト、パイロン、マーク・トゥエイン、ラフカディオ・ハーン等、英仏文学・思想の翻訳者としても重要な一翼を担ってきた。また、柳田民俗学研究を契機に、柳田と同じく郷土会の一員であった牧口常三郎の研究に多年精力をそそぎ、『牧口常三郎全集』第1・2巻（『人生地理学』初版）および第8巻（『後期教育論集I』ほか）の編集・注釈作業に従事したことも知られている。本著作選集第7巻も、齋藤のそうした《百科全書派》的研究をうかがわせる重厚多彩な内容となっている。収録論文のタイトルおよび初出情報とを記すと、以下の如くである。

- ① モンテスキュー教育思想の研究序説 9-198頁
 第1節：「東京電機大学理工学部紀要」Vol. 5、1983年
 第2節：「東京電機大学理工学部紀要」Vol. 6、1984年
 ② D・H・ロレンス教育思想の研究序論 199-286頁
 第1節：「東京電機大学理工学部紀要」Vol. 4、1981年
 第2節：本著作選集への書下ろし

- ③ 教師という職業の歴史 287-340頁
 : 伊藤昇・斎藤正二ほか編『教育演習15 教師の仕事』学文社、1977年
- ④ 教育哲学入門への再入門 341-390頁
 : 堀内守・井野正人・斎藤正二編『現代哲学選書15 教育の哲学』北樹出版、1982年
- ⑤ 講談社文庫『フランクリン自伝』訳者解説 391-409頁
 : 斎藤正二訳『フランクリン自伝』講談社、1973年
- ⑥ 若き牧口常三郎——評伝的研究の一小部分 410-596頁
 第1節:「創価大学教育学部論集」第26号、1989年
 第2節:「創大教育研究」第3号、1993年(ただし執筆年代は第1・2節とも1981年以前)

一見して明らかのように、出版業界に流通している教育学教科書類をひもとけば散見されるような、ロックやペスタロッチやデューイといった名前はここに見られない。もちろん、著者はそれらの《大家》たちを軽視しているのではまったくない。そうではなくて、およそ従来の教育史・教育思想の研究(国の内外を問わず)が——意識的にか無意識的にかは分らないが——完全に見落としてきた存在に対し、正当な位置=評価を与えようとの《知的良心》のなせるわざと見るべきである。モンテスキュー論ばかり、ロレンス論ばかり、フランクリン論ばかり、牧口常三郎論ばかり、著者斎藤の曇りなき眼差しは、歴史の真実相に光を当て、旧来の枠組みにがんじがらめにされた我々の眼から、《先入見》のうろこを一枚一枚はがして見せてくれる。わが国はおろか、世界水準で見ても、本書ほど真理探究に誠実で、既存の思考様式に対して挑戦的な思想研究書が他にどれほど存在するだろうか。その意味で本書は、《著作選集》最終巻を飾るにふさわしい、斎藤思想史学の最高到達点といえるし、それはまた戦後日本の思想史学の最高到達点のひとつといってもけっして過言ではないだろう。

なかでも特筆すべきは、全600頁中、3分の1を⑥の《牧口常三郎研究》が占めることである。これは斎藤が1981年に発表した『若き牧口常三郎 上』(第三文明社)の《続編》で、当初「上巻」用に執筆されたが紙幅の関係で(幻の)下巻用に組み置かれた原稿の一部である⁽²⁾。すなわち、北海道尋常師範学校入学前後の牧口を主題にしている。この続編の刊行を長年心待ちにしていた読者も少なくないだろうから、本誌書評としてもそこに特化した内容紹介をすべきかもしれないが、それなら直接本書を読んで頂ければ済むことであるし、なにより、通り一遍の要約で済ませては原著者の傾けた並々ならぬ労力に対して礼を失することになる。それゆえここでは、当該続編についての評者なりの《読み方》を示すことで、読者のための一つの(あくまで一つにすぎないけれど)水先案内役を果たしたいと思う。

2. 時代とセットで《人物》を捉える

⑥「若き牧口常三郎——評伝的研究の一小部分」(以下「続編」と略記)を読むさい、評者として注意したい点は2つある。1点目は、やはり正編『若き牧口常三郎 上』(以下「正編」と略記)を念頭に置いて読むということである。それは、斎藤がこの続編で駆使する《研究方法》が、正編においてこそ入念に説明され、かついかんなく発揮されているからである。斎藤自身、同書でいくたびとなく強調しているが、思想史研究も一箇の《学問》である以上、いずれは後進の研究によって訂正され凌駕されるために存在する。であれば、真に学ぼうとする読者にとって意味をもつのは、研究書が提示する《知識》ではなくて、著者が用いる《方法》であるはずだ。このことはまた、牧口本人が「考へよりは考へ方を」⁽³⁾という教育学的標語で端

的に伝えたかったことでもあろう。

とはいえ、約700頁ある正編を全部読むだけの余裕がないという読者もおられよう。そうした方には、せめて同書末尾の「上巻のSUMMARY」^{サマリー}(4)だけでも読まれることをお勧めしたい。斎藤の方法は、彼自身が「全体性の把握」と呼ぶものに尽きる。斎藤自身の声に聞こう。

「若き牧口常三郎」の人間形成および思想発展のプロウセスを、孤立した個人の精神の運動とは見ずに、複雑で相互に関連する社会的諸側面との密接な関係において、その全体性を把握するように努めること、したがって、常に流動する物質的現実との関わりにおいて産みだされる“若き牧口常三郎”の思想形成過程の時期・位置・構造などを可能なかぎり正確に捉えること、どんな場合にも“若き牧口常三郎”という当面の研究対象はなまの人間であるとの感じかたを忘れないようにすること、その他、過剰なくらいの“方法上の留意事項”を守るよう心掛けた。そうすることによって、“若き牧口常三郎”という個人像があまりにも鮮やかに日本近代民衆史の描き出す“青春像”(日本近代社会が抱える諸矛盾や諸悪を背負わされて喘ぎながらとぼとぼと歩みはするが、理性と正義と人類愛とを片時も忘れることなく明日の希望を抱きつづけた“青春像”)と合致するのを知らされた。そのかぎり、まさに、牧口常三郎は『時代の子』Kind der Zeitであったとすることができる」⁽⁵⁾

つまり、牧口常三郎という一個の人間を、彼が苦悩し行っていた複雑な時代状況とセットで理解するということである。そのために斎藤が導入する“方法上の規則”については、紙幅の都合上ここでは詳述しない(読者各々「上巻のSUMMARY」を手がかりに、掘んでほしい)。評者としては、正編で斎藤が用いた《対象への接近法》を念頭に置くことで、続編での議論展開の必然性が明瞭に理解できるし、またそのぶん、歴史と人間とを理解する《知的興奮》が増大するであろう、との指摘でとどめる。

ここで続編の中身に少し触れておくと、「第1節」で斎藤は、牧口の師範学校時代について描くべく、《師範制度》そのものの歴史とそこに投影された近代日本の国家主義に関し、博引旁証の叙述を行う。その結果、牧口が後年展開した《師範教育改造論》のラディカル性がおのずと浮かび上がるのである。また「第2節」では、牧口にそうした反骨的思想の形成を可能にさせたものを求めて、彼が幼少期を過ごした新潟県刈羽郡荒浜村での経験に遡及し、その経済状況や教育制度についても論及する(当時の荒浜村が意外と経済的に豊かであり、初等教育内容も非常に進歩的であったとの指摘は、評者の知る限り斎藤が最初である)。その結果、牧口思想の特徴が《海洋的思考》にあることが炙り出され、今度は海洋的思考の構造を描出すべく——牧口が生涯影響を被ることになる——アダム・スミスおよびイマヌエル・カントの哲学に論及するのである(海洋的思考という観点でスミスとカントとをつないだ論考も、これまた従来ほとんど存在しない)。一個の人間が胚胎する思想を、政治・経済・文化・思想すべてを包括した全体的な時代状況とセットで理解しようとする姿勢が、一貫して生彩を放っている。

3. 著者を牧口研究へと駆ったもの

評者として注意したい2点目は——これは第1点よりもはるかに重要と思う——本書収録の6つの論考のうち、牧口を主題とするのは⑥(=続編)のみであるが、他の諸論考もけっして牧口研究と無関係ではないということである。

もつとも、歴史的な存在としてのモンテスキューやロレンスが、歴史的な存在としての牧口と多少とも関係しているというのではない。評者が注目したいのは、斎藤がそれらの論考を執筆した時期である。すなわち、先述の通り、⑥は当初『若き牧口常三郎 上』の一部として書かれたもので、「上巻」と同じ1970年代後半から1981年までの執筆である。したがって、②「D・H・ロレンス教育思想の研究序論」（1981年）や、③「教師という職業の歴史」（1977年）は、まさに『若き牧口常三郎』正編・続編と《共時的》に執筆されたものである。また④「教育哲学入門への再入門」（1982年）は、初出の『現代哲学選書15 教育の哲学』序文を見ると、数年前から準備されていたようであり、それゆえ同論文も牧口研究と《同時並行的》に執筆されたものと見てよいのである。

さらに④「モンテスキュー教育思想の研究」（1983-84年）は、『若き牧口常三郎』正編・続編の翌年の発表である。両者の執筆時期が重なるか否かは不明だが、両者間の関係がゼロであるはずはない。じつは、斎藤は1983年1月に、自身が編集委員を務めた『牧口常三郎全集』第1巻（『人生地理学（上）』）を収録）を刊行している（彼が同書に付した脚注・補注は、原稿用紙にして約1800枚分に相当する）。①の第1節が「東京電機大学紀要」に掲載されたのが1983年夏であるから、この時期、斎藤の意識関心が牧口とモンテスキューとによって《共同占有》されていたと見ても間違いあるまい。

つまるところ評者が言いたいのは、①～⑤の諸論文が、斎藤正二という思想史家を《若き牧口常三郎》研究に没頭させた理由を暗黙のうちに伝えているということである。それは、1980年頃の日本において、牧口常三郎という思想家が「なぜ」そして「いかに」受容されたかという《歴史》を、したがってまた、牧口思想が本来孕んでいた可能性の大きさをも教えてくれるのである。げんに斎藤自身も『若き牧口常三郎 上』の序文で、「結局、これこそが“若き牧口常三郎”の実像であるとして当方が提示しようとする幾つかの『事実』も、構造的には（あるいは関係概念的には）一九八〇年代日本社会に生まれ合わせたひとりの人間の『いかに現実を生きるか』の意志とくひと組みをなすに過ぎない」⁽⁶⁾と述べている。この率直な告白ほど、斎藤の牧口研究の堅実さと誠実さを告げるものはない。

4. 教育とはそもいかなる営為か

では、斎藤を牧口に没頭させた理由とはなにか。紙幅の関係上、①～⑤の各論文について詳説する余裕がないのを遺憾とするが、ほんのさわりでも、「一九八〇年代日本社会」における斎藤の問題意識をのぞき見てみたい。

①「モンテスキュー教育思想の研究序説」で、斎藤は、従来の教育学理論の大半が——保守派か進歩派かを問わず——《権力御用学》の役を担ったとの診断を下す。「教育学ないし教育学史を跡づけていくと、いわゆる教育学pedagogy, Pädagogik, pédagogieが、どんなにか各時代・各社会の支配権力にとって都合の好い御用学（＝官房学）の役割ばかり結果的に演じてきたか（ということは、進歩的で良心的な教育理論も結局は体制維持の道具として取り込まれてしまったの意であるが）という事実を知らされる […]。教育学研究者が真面目に自己省察すれば、いやでも絶望的にならざるを得なくなるのは当然である」⁽⁷⁾。——教育学の《虚構性》と《無力さ》をこれほど赤裸々につづった文章が、当時の日本にどれほど存在したろうか。教育学の官房学的体質を認識（断じて承認ではない！）し、それとの対決策を示した思想家として、斎藤はモンテスキューを取り上げるのだが⁽⁸⁾、既成の教育学思想にかくも厳しい点をつける彼にして、牧口の存在は別格だった。その意味の大きさを考えたい。

②「D・H・ロレンス教育思想の研究序論」は、小説『チャタレイ夫人の恋人』に、『教育』という営み自体がそもそも人間の《権力意志》に起源をもつ、との洞察を見出す論考である（世上、同書を《猥褻文学》とする俗見がいまだに存するが、斎藤のロレンス論はその対極に位置する）。「人間が本当に生きるためには、古い伝統文化に身丈を合わせて“bring up”されるとか、産業主義管理社会体制に適應する“adapt to”とか、そのような『教育』の定型発想をまづ壊して、その向こうに在る“いきいきした生活”やその奥深い底に在る“生命力”そのものを、肉体をも当然に包含する『人間の全体』において握み切らなければならない、というのが、わがロレンスの思想的主題であった。現代教育学は、近代産業社会への“適應”adaptationのみに専念しているために、目まぐるしく変動する現実社会に振り回され、いつも後手後手に回って何も出来ずにいるのが、その偽らぬ実状である⁽⁹⁾。——国民や社会人であるまに《一個の人間》であることの意味を熟考せよ、そこから教育理論は再出発を図れ、それ抜きにいくら伝統文化や社会適應といった言葉をふりかざしたところで、およそ現状打開など不可能だ、との提言である。「適應」という言葉の流行に潜む《教育学的暴力》を、斎藤は鋭くも看破している。この思想主題を軸にすると、ロレンスと牧口という、一見対極的で無関係に思える2人の距離が急速に狭まるのである。

④「教育哲学入門への再入門」では、如上の問題意識が、1980年頃の文教政策との関係から、より直裁的に吐露されている。「ほんの一つ二つの例外を除けば、歴代の文部大臣は、就任早々、判で捺したように『教育勅語は古くならない』と放言するのを常とするが、この発言は[…]教育の目標や枠組を或る画一的なものに固定してしまおうと考えている点で、大きな誤謬と危険とを孕んでいる。[…]しかも、一部の識者から、画一性に対する文化的批判が出されると、こんどは文教政策担当者によって『画一性はよくないものであるから、画一化を避けるように』という趣旨の新たな“画一的”標語がばらまかれる。こうなると、事態はますます画一化の方向に固まってゆくことになる。あたかも『ゆとりのある教育』という標語のもとに、強制的に『ゆとり』をつくらせることが可能であるかのように思い込ませる“学習指導要領”的発想と同一である⁽¹⁰⁾。——文部省が「ゆとり教育」を<改訂版>学習指導要領のなかで謳ったのは1977年のことであったが、同時にその要領のなかで「君が代」を国歌と規定しているという重大事をあらためて想起したい。そうした国家主導型教育に対して、斎藤は疑義を呈したのだった。この論考が『現代哲学選書15 教育の哲学』の一部として発表されたと同じ年、斎藤は一方で『人生地理学 上』の補注・脚注の執筆作業に日夜打ち込んでいた。いずれも、彼が時代と必死に格闘し、切り結ぼうとしたところから発した言論活動にほかならなかった。

5. 牧口思想のメッセージ

もう筆を置かねばならない。本書所収の《牧口常三郎研究》よりも、その背景的・周縁的事項のほうに多く紙数を割いたが、評者としてはこれ以外仕方がなかった。牧口を論じたページでは、他の論文に比して斎藤が如上の《同時代の問題意識》を明言しておらず、そこを読み取らないことには何も評したことになるしと考えたからである。

⑥「若き牧口常三郎——評伝的研究の一小部分」については、わずかな補足で済む。同論文は、北海道尋常師範学校に通った牧口が、なにゆえに同級生たちとは違い「師範学校タイプ」と呼ばれる《上位下達》主義に染まらなかったか、その一点をめぐる200頁を費やす。詳細は読者各々に読んで頂くことにして、結びに、クライマックスとなる叙述の一節を引こう。随所にちりばめられた著者の《同時代の問題意識》を聞き取りたい。

「けっきょく、本稿筆者が今後とも繰り返して強調したい事柄は、われらの“若き牧口常三郎”が初代文部大臣森有礼の《秀才狩り》の網の目に引っかけたて無理矢理に北海道尋常師範学校（この中等教育機関は、その当時、北海道では“N o. 1”の学務内容の水準を保持し、高等教育機関である札幌農学校に次ぐ“N o. 2”の英才たちを集めていることでも著名であった）に連れて来られ、この学校で四ヵ年の学習過程や寄宿舎生活をかん間、他の同級生たち（この場合、上級生や下級生をも含めて考えることになるが）が等しな並みに身に著けてしまった所謂「師範学校タイプ」なる大勢迎合的・二重人格的・要領第一主義的処世法（立身出世式の、世渡り術）の習得を断乎斥けつつ、己れひとりには敢て意識的に学校当局の押し付ける兵式訓練や密告奨励慣行や教育勅語崇拜を受け入れる代わりに徹底的な開明思想の理解および受肉化に赴向していった、という精神形成課程の鮮烈さないし正しさに就いてである。あるいは、おまえは牧口常三郎のみ賞讃して他の師範学校卒業生を悲しげに貶し付けているが、それでは公平性を虧くことになるではないか、と言って、非難の矢を向ける者があるかも知れない。しからば、借問す、明治以来の師範学校卒業生のうち誰かひとりでも牧口と同じく国家権力と闘って獄死の道を選んだ事例が有るか、と。もしそのような事例が有るといふのならば、即刻、れっきとした証拠付きで提示してもらいたいとおもう。師範学校で学んだらさいご、国家権力に刃向かうことが出来ないように徹底的に飼ひ狂らされてしまったのであるから、このことは、どうしても致し方無い。個人的に誰がいいの誰がいけないといった矮少問題をあげつらっているのではない。曲解無きよう望む」⁽¹¹⁾。

——思わず長文の引用となったが、斎藤の文章のもつ独特の迫力に魅せられて、評者として一行たりとも省略できなかつた。

（八坂書房、2004年、598頁）

注 引用文中の傍点は原文通り、下線は評者による。

- (1) いいだも「フィクションとしての民族国家」『叢書文化の現在12 仕掛けとしての政治』大江健三郎ほか編集、岩波書店、1981年、16頁。
- (2) 『斎藤正二著作選集7』八坂書房、2004年、481—482頁。
- (3) 牧口常三郎『牧口常三郎全集6』（『創価教育学体系』第4巻所収）、第三文明社、1983年、290頁。
- (4) 斎藤正二『若き牧口常三郎』第三文明社、1981年、689—702頁。
- (5) 同上、692頁。
- (6) 同上、5頁。
- (7) 『斎藤正二著作選集7』11頁。
- (8) モンテスキューの『法の精神』を《教育思想》として主題的に論じた例は、少なくともわが国では従来皆無に等しい（評者の知るかぎり、おそらく欧米でも同様の状況ではないかと思う）。同様のことは次に挙げるロレンス論についても言える。教育と権力との癒着を診断した“独立不羈の思想家”としてのモンテスキュー像、ロレンス像を描き出したという点で、本書の刊行意義＝学術的貢献度は、たんに教育学の領域にとどまらず、《西洋思想史研究》としても非常に高い位置にある。
- (9) 『斎藤正二著作選集7』239頁。
- (10) 同上、343頁。
- (11) 同上、508—509頁。